

一度きりの

尊い道を

今歩いている

榎本 栄一

『2025年難波別院カレンダー』9月のことば



掲示板のことば

最近ずっと手首が痛い。その上、足も痛めた。40歳を過ぎると身体のだこかが痛くない日はない、などと言っている人が居た。若い頃はまさかそんなはずはないと思っていたが、正にその通りになっている。体力や気力、感じる時間の長さなど、子どもの頃と今とでは雲泥の差を感じる。

今は、これまで祖父母や父母が辿った道を、私も同じように辿っている。いつの間にか白髪が増え、集中力もなくなり、時間があっという間に過ぎていく。

子どもの頃、年に一度お盆に会いに行っていた祖母が言っていたことを思い出す。「夏が来たらすぐ次の正月が来るし、正月が

過ぎりや、すぐ夏じゃけえまたすぐ会えるよ」と。正月はまだまだ先だし、夏休みは正月から8ヶ月も先の話だ。「婆ちゃん、それはすぐとは言わんやろう」とその時は笑っていたが、近頃はその通りだと思うようになってきた。

人は自分の物差しでしか物事を測れないし、人それぞれ持っている物差しは違う。そしてその物差しの長さは、経験や学びを得て変わっていく。

これまで歩んできた道は人それぞれ違う。誰しもやり直すことはできない道だが、その道は人生とは何かという問いを私に問いかけてくる。その問いを通し、様々な気付きをいただくことで、これまでの道が尊いものとなっていくのだと思う。

今月のことば

七宝樹林^{しちほうじゅりん}くにみつ

光耀^{こうよう}たがいにかがやけり

華菓^{けか}枝葉^{しえ}またおなじ

本願^{ほんがん}功德^{くどく}聚^{くじゅ}を帰命^{きみょう}せよ

ようだな」と、非現実的な世界を感じていました。

しかし、よくよく考えると、今の私たち人間社会の世相は一体どのような色合いなのでしょうか？ 私たちはそれぞれが光り輝いているのでしょうか？

「七宝樹林」とは、極楽浄土の樹木ですが、金、銀、瑠璃^{るり}、玻璃^{はり}、しゃこ貝^{しゃこかい}、珊瑚^{さんご}、瑪瑙^{めのう}など七つの宝で成り立つ樹木を意味しています。

それは、樹木の幹だけでなく、実も枝もそれぞれが七宝となって、それぞれの光を放ち輝いていることを意味しています。

このご和讃をいただいた時、最初は、「あくなんか夢物語のようで、まるで日本昔話の浦島太郎が竜宮城で目にした世界の

人間の娑婆世界は、それぞれ国を見ても、それぞれが自分中心な主義主張を唱え、「自分の正義」を押し付けあっています。お互いに競争する事を基本とし、憎しみ合い、ねたみ、他人に優劣をつけて、人を見下したり、差別をしてしまう世界です。残念ながら、私もまた、時にはそういう事をしてしまう人間です。

このご和讃を何度もいただくと、自分の日常生活での煩惱まみれの姿が、あらわに浮き彫りになってくるのを感じます。もしかしたら宗祖は、その「気付き」を意図して、あえてこのご和讃を書かれたかもしれません。そのような現実的な世相を見渡していても、逆にこのご和讃が、ただの夢物語の世界に終わらないところを感じます。そこからは今の私の姿を自分に知らしめる、阿弥陀の智慧を感じます。

また、それぞれがそれぞれらしく、自分の色も他人の色も損なうことなく、精一杯光り輝き続けることのできる世界を、本当は、みんなが共通して願っているのではないのでしょうか。それはいわ

ば、国や人種、大人や子ども、男女関係なく、姿や形、環境や境遇が違っていたとしても、全ての人がお互いを尊重し合い、それぞれの自分らしい輝きを他の人の輝きを損なうことなく、調和しながら共に生きてゆく世界が開かれているのではないのでしょうか。そこに本願功德を願う集まりがあるのだと思います。

その世界とは、一番じゃないといけないとか、自分に劣等感を持つ必要のない、同じ目線で同じ場に生きていける世界だと思っています。

(前田 志朗)

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 482頁

(第二版) 576頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 122頁

へ知ってる？ 仏事のあれこれ

「お墓参り」を

大切にしましょう



く先立たれた方をご縁にく

大阪市 長教寺 稲垣 章子

お墓参りというと、一般的には「石碑」のお墓を想像しますが、私のお寺では納骨堂の「お内仏付納骨壇」にご遺骨をお預かりし、お参りをしていただいています。

私の一日は、まずお寺の周りや納骨堂を掃除することから始まります。夕方にも納骨堂を見に行くと、新しい仏花が入っていたりお供え物が増えていたりして、今日もお参りにこられたのだなと思うと、何だか心がほっ

こりします。お盆、彼岸、年末年始にはご家族そろってお参りに来られる方も多いです。

平生はそれほど頻繁に来られませんが、時々、お参りに来られたご門徒さんとお会いできたときにお言葉をかわすと「今日は娘の入学式だったの」で父に報告に来ました。「主人が好きだったお菓子があったので持ってきた」「昨日、母の夢を見たので会いに来ました」「なかなかお参りに来られ

なかったのですが、やっとなれました」など、いろいろなお話をしてくださいます。お参りされる皆さんの心の中には、どこにいてもずっと先立たれた方が生きていて、その方を思いながら共に生きておられるのだと感じます。

以前、私たちのいのちを花に例えて「花びらは散っても花は散らない、形は滅びても人は死なぬ」という金子大栄先生のお言葉を知り、とても心に残りました。なぜなら、母が亡くなったときに父が「お母さんが言いたかったことをこれから聞いていきたい」と言いました。私は当初、母は亡くなったのに何を言っているのかなと思いました。しか

し、このお言葉を知って、これから本当の意味で母と出会い直し、生死を超えて共に生きていきたいという父の思いがあったのではないかと思ったからです。

数年後、父も亡くなり姿かたちは見えず、会えないのはとても悲しかったのですが、両親と交してきた言葉や思いは心に残っていて、ずっと私の中に生きていると思えるようになりました。

そのような思いを通して、お墓参りや法事でご本尊に手を合わせることは、先立たれた方をご縁に、いま生かされている自分の在り方を見つめ直し、亡き人と出会い直し、いくとも大切な場だと思えます。

仏教マンガ・仏さまのおしえ

絵：小川ゆきえ〈242〉

